慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	雑誌史学創刊
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.12 (1921. 12) ,p.1707(153)-
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19211200-0153

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヶ年に亘つて發表せられた勞働保險に關する論文を集輯したものである。本書の內容は發表の順序に從つて收錄せられたる左の六篇から成つて居る。さうしてこれ等の諸論文は孰れも皆、發表の當時既に識者の間に多大の反響を與へた雄篇である。

一、勞働者養老保險、
二、勞働保險の必要及び可能、
三、勞働者疾病保險、
四、勞働者業務災害保險、
五、勞働者失業保險、
六、憲政會提出の疾病保險法案の批評、

博士の勞働保險に對する態度は第二の論文「勞働保險の必要及び可能」並びに第六の論文「憲政會提出の疾病保險法案の批評」に於いて能く窺ふことが出來る。思ふに我が國の工場法に規定してゐる職工の業務上の災害に關する事業主の扶助の條項が殆んど見る影もない貧弱なものであり、これを改善する上にもまた事業主の負擔を輕減する上にも保險制度を以て勝れたものであると斷定し、團結權の確認せられない我が勞働者の生活不安を叙して保險の必要を力說し、また統計の不備を遁辭とする非難を排斥して保險實行の可能を主張する短かい論文は博士の所論の基調をなすものである。

更らに憲政會の疾病保險法案に對する批評は見方によつてはその他の諸篇の要約であるといふことが出來る。加之ならず、勞働保險に對する博士の具體的意見は、孰れの論文に於けるよりも最も多くこの逐條批評の間に見出すことが出來る。從つて我が國に於いては如何なる勞働保險制度を實行すべきであるか、といふ問題に對する解答を得むと欲するものは、この篇に據るのが最も捷徑であらう。

「勞働者疾病保險」の篇は主として自由主義に基く保險制度と强制主義に基く保險制度そのものに就いて比較研究をなし、自由主義に基くものの不振原因を擧げ、またその補助によるも十分の效果を奏せざる所以を述べ、强制主義の採るべきを主張せる論文である。次ぎの「勞働者業務災害保險」の篇はその次ぎに揭げられたる「勞働者失業保險」と共に本書に收められたる論文の內量に於いて最も長篇であると同時にその質に於いてもまた最も優れたるものである。前者に於いては近代的產業組織の特徵として著しく增大したる業務上勞働者の蒙る災害より說き起し、それに關する事業主の賠償責任、並びに各國に實行せられた各種の保險組織の細論に亘り、後者にありては失業の本質より救濟方法としての保險制度に就いて各國の組織を多くの統計を擧げて詳述してゐる。

これを要するに博士の論旨は飽くまで溫健著實を以て始終してゐる。一二の些細な個處に不滿を感じないでもないが、大體博士の主張するところは首肯することが出來る。我が國に於いても愈々勞働保險の必要が認められ、新聞紙の報導するところに依れば最近農商務省に於いて今期の議會に提出すべき勞働保險法案は脫稿後審議中であるといふことである。然しながら我が國に於ては勞働保險に關する文獻は寔に乏しい。在來行はれてゐるものも大抵は概論であつてそれも多くは外國の著書の飜譯の類に過ぎないもの許りである。この時に方つて博士の多年の眞摯な研究によつてこの論文集が公刊せられたことは學界のために慶賀すべきことである。

（園　乾治）

雜誌「史學」創刊

慶應義塾大學文學部史學科の同人諸氏今回相謀つて雜誌「史學」を創刊す。近時史學の研究漸く盛んならんとする時に當つて、本誌の公刊を見るは誠に其の時機を得たるものと云ふべし。其の內容の主なるもの次ぎの如し。

希臘二大史家　田中萃一郎
「古事記及び日本書紀」の新研究を讀む。　橋本增吉
中世紀に於ける英國の王職　占部百太郎
古代日本人の民族的觀念　松本芳夫
支那古姓とトーテミズム（上）　松本信廣
回教法制の源流（一）　飯田忠純

殊に橋本教授の論文は約六十頁に亙る勞作にして記紀研究者必讀の文章なり。三田史學の隆興を期待しつゝ特に江湖に紹介す。因みに同誌は年四回發行、會費四圓の由。